

<書評>

1910～1945 朝鮮に於ける日本の植民地支配の遺産：新しい視点から

ジョージ・アキタ & ブランドン・パーマー

MerwinAsia Publishers 2015

書評者：アルドリック・ハマ

「過去を制する者は未来をも制する。現在を制する者は過去をも制する」

ジョージ・オーウェル

ハワイ大学マノア校のジョージ・アキタとコースタル・キャロライナ大学のブランドン・パーマーは、朝鮮に於ける日本の植民地政策の起源について、日本統治下の朝鮮を当時のヨーロッパ諸国の植民地と比較している。その結論はこうである。日本の政策の朝鮮への適用は、「現実主義、穏健、相互主義、バランスの配慮が基調となっていた」のであり、それがあったからこそ、「韓国は戦後、奇跡的な発展を遂げることができた」というのである。この二人の著者は、広範な史料を綿密に研究している。その中には、日本の植民地政策を推進した明治時代の指導者も含まれている。さらに、現代の研究者が書いた史料にも当たっている。

本書の結論は、現在の常識的な解釈とは著しい対比を見せている。現在広く信じられている解釈は、植民地時代（1910～1945）について「韓国民族主義的」な物語に依拠しており、それによれば、韓国は日本の帝国主義の犠牲者だったのだとあり、「文化抹殺」「搾取」「慰安婦（性奴隷）」などの諸悪の根源は日本人だったことになっている。また、民族主義者の作った物語では、植民地時代に朝鮮が受けたかも知れない恩恵などはその存在を一切「承認することを拒絶」しているのである。アキタ本人も、つい最近まで民族主義的な物語を受け入れていた——反証を突き付けられるまでは。まことに、両著者が指摘する所、この民族主義的な物語は、味方と敵を「白と黒」にはっきり区分けして、「事実」として呈示している。歴史を批判的に見る読者は騙されてはいけないと本書は警告する。つまり、民族主義的な物語——政治的に正しいとされる歴史観——は客観性を欠いており、イデオロギーが事実を駆逐してしまった典型的な例だと言うのである。両著者は、「歴史的な証拠を『再点検』し」、民族主義的な物語が主張する意見に「学問的な反論」を加えている。

韓国の民族主義的な物語の信条の一つは、日本が朝鮮民族を文化的に絶滅させようと図り、そのために朝鮮文化を非合法化したというものである。ところが、アキタとパーマーの指摘によると、朝鮮総督府は、「朝鮮の主要な歴史的遺跡と象徴」を保存するために多大の努力を注ぎ、さらに進んで、朝鮮の文化遺産を保存する法律を制定するに至った。その恩恵は今日にまで及んでいる。朝鮮総督府がこういうことをしたのは、奇異と思われるかもしれないが、朝鮮人のアイデンティティを確立させるためであった。公立の学校では、これまた朝鮮人のアイデンティティを確立させるために、朝鮮語と朝鮮の歴史を教えたのだった。伝統的な朝鮮衣裳ハンボクの着用が許され、1940年代初頭まで、映画で朝鮮語のハングルを使用することが認められていた。¹ 1941年には、朝鮮総督府は朝鮮に在住する日本人に、朝鮮語学習を奨励する布告を出した。当時は、日本語会話のできる韓国人が多くはなかったからである。²

民族主義的な物語によると、日本に支配されていた時期は「暗黒時代」であり、朝鮮の人々の苦しみは「世界に例を見ない」ものだったと言う。しかし、アキタとパーマーは、同時代の西欧の植民地支配と比較してみると、日本の政策は全く「穏健」なものだったと指摘する。西欧の植民地帝国は、全般的に征服した民族の福利には関心を持っていなかった。したがって、植民地の人口の大半を占める農村を近代化しようという努力は限られた範囲内でしか見られなかった。³ アキタとパーマーの示唆する所によると、西欧の植民地支配の原則は、「大都市の経済的需要に奉仕することであり、植民地全体の繁栄を目指すものではなかった。」西欧の植民地の被支配民は、農業もしくは建設プロジェクトに従事することを強いられた。ベルギーが支配したコンゴ自由国では、「割り当てられたノルマを果たせなかった者は、殴られ、鞭うたれ、拷問された」。オランダ領東インドでは、インドネシア人は、1年のうちの66日は、「政府のために換金作物を栽培する」ことを強いられた。オランダ人および現地の協力者たちは、「収穫の半分を搾取」し、その結果、住民は飢餓に瀕することになった。フィリピンは米国からプランテーションとして扱われた。米国当局は、「換金作物および鉱業などの

¹ 書評の筆者は、2016年に、韓国ソウルのソウル歴史博物館で、1930年代からの、ハングルで書かれた新聞を確認することができた。

² 「日韓併合百年」首相謝罪に反対する会編『日韓併合は日本の誇り』（史実を世界に発信する会）（2010）

³ ヨーロッパ人は、アフリカの植民地を近代化する努力をしなかった。アフリカ諸国が解放後にも繁栄することができないのは、これが一つの理由となっている。しかし、たとえば、韓国が主要な輸出国になっているのに、アフリカ諸国は独立してから何世代にもなるのに、それができていないのは、もっと深い所に根があるということを示唆している。

採掘産業を基礎にした従属性の強い輸出経済を促進」しようとしたのだった。米比戦争(1899~1902)の間、フィリピンのゲリラに対する物資の供給を絶つため、民間人は村から追い出されて、強制収容所に収容された。ここで、囚人たちは飢餓と病気で死んで行ったのだった。この「平和化」の美名の下に殺害されたフィリピン人は百万に上った。ヨーロッパが支配するアフリカ植民地でも同様の強制収容所が使われた。それとは対照的に、朝鮮には強制収容所は存在しなかったと両著者は指摘する。

日本の穏健な植民地政策のもう一つの例として本書が指摘しているのは、テロに対する朝鮮総督の対応である。フィリピンでは、米国の占領軍は破壊活動の容疑者を拷問にかけ、逮捕したゲリラは処刑した。一方、1910年に、日本の朝鮮総督寺内正毅暗殺計画が発覚したときには、翌年になって何百人もの朝鮮の民族主義者が逮捕されたが、結局有罪判決を受けたのは百五人だけだった。しかも、その判決の大部分が、上訴の結果、無罪になったり減刑されたりしたと本書は述べている。韓国の近代史を知っている者なら、共産主義の北朝鮮の破壊活動に苦しめられていた韓国の公安当局が、米国の習慣に同調して、容疑者を拷問にかけ、「消滅」させたことは指摘するまでもないだろう。

本書のテーマは、日本の植民地支配の時代を綿密に検証してみれば、この時期は「暗黒」でもなければ、特に野蛮でもなかったことが分かる、ということである。朝鮮人も課税はされたが、この地域の近代化を成し遂げた資金は主として日本人が提供した金であった——朝鮮総督府は「いつも金に困っていた」。輸送インフラの建物、政府の庁舎、病院、下水システム、朝鮮人の家庭に送る水道や電気の施設などの費用を負担したのは、主として日本人納税者であった。ソウルは近代都市に生まれ変わり、道路は舗装され、高層建築が立ち並んだ。識字率も向上した。初等中等教育が普及し、女性を含めたすべての子供が学校に通えるようになった。日本からの補助金によって、鉱業、農業、製造業、建設業などの分野で産業が創出され、それが雇用と資本を生みだし、その結果、朝鮮の中流階級が誕生することになった。⁴ 総督府はさまざまなレベルで、社会改革にも貢献した。世襲制のエリートである両班(ヤンパン)の高圧的な影響力を排除し、非差別階級の白丁(ペクチョン)の社会的地位を改善し、さらには苛斂誅求に苦しむ一般の朝鮮人の負担を軽減してやった。両著者の指摘によると、韓国の反日的資料でさえも、植民地支配を受ける以前は、ほとんど(97%)の朝鮮人が政治的な権利が与えられなかったことを示している、というのである。「一般人民は虐

⁴ 本書で触れられていないことは、終戦後の1951年に日本との講和条約が締結されたが、日本は韓国に於ける全ての所有物と資産を没収されたにもかかわらず、補償を求めることが許されなかったということである。

待され、忘れ去られ」、改革は抑圧された。李朝（1392－1910）の支配下では、国王の代官たちが、官職や土地を金で売っていた。また、国王の寵愛も金で買えるのだった。いまさら驚くほどのことではないが、民族主義的な物語は、朝鮮の植民地になる以前の時代の身の毛もよだつような現実を全く無視している。民族主義的な物語を信奉する人々は、封建制下のエリート支配の韓国を懐かしみ、逆に、現在という時代は、軽蔑すべき外国人と『韓国内の協力者』によって建設されたものだからといって、これを評価しないのである。

注意深い歴史家なら、韓国の民族主義的な物語は取るに足らないものだと気づくはずだ。韓国人の自民族中心主義と外国人排斥主義に過ぎないと看破できるからである。それにもかかわらず、この物語は、韓国の国境を越えて世界に広まり、日本に対する外国人の態度と政策の基礎をなしている。本書はこの異常に事態には言及していないが、もっと研究する価値があるのではなかろうか。民族主義的な物語は、現在の韓国の「社会的な歪み」は日本のせいだと言い、これが、「慰安婦」や竹島のような問題で日本に対して強硬な態度を取る原因になっている。この民族主義的な物語をアメリカが採用する結果として、イデオロギーに染まった、歴史的に不正確な日本非難の声明をアメリカ政府が発表するようになる。第二次世界大戦の間に、日本が「軍隊内で売春を強要した」ことを非難する下院決議がその代表である。民族主義的な物語は、日本の知識人の中にも信奉している人が少なくない。みんながというわけではないが。そういう知識人は、たとえば、韓国から理不尽な要求を受けても、つねに融和的な立場を取るようにと呼びかけるのである。民族主義的な歴史物語が到る所で受け入れられている限りは、不信と憤激が収まる日はやって来ない。

本書ほかいくつかの本が、民族主義的な物語がどういうものを明らかにしているが、にもかかわらずそれは執拗に存在し続けている。⁵ 本書の示唆する所は、民族主義的な物語は、韓国人の、「異民族の支配下」での「服従を強いられた屈辱感」から来る、深い「怨恨」を映し出しているということである。しかし、民族主義的な物語が、国境を越えて限りなく拡散するという事実は、それだけでは十分には説明できない。一つ考えられることは、民族主義的な物語を包み込んでいる「加害」と「抑圧」というキーワードがロマンティックなイメージを連想させるがゆえに魅力的に感じられるからだということである。両著者は、1950年代初頭から1990年代中葉まで、この民族主義的な物語が西欧とアジアの学界を制覇していたと述べている。1950年代から1960年代にかけて、左翼のドグマが知識階級の中に浸透し、西欧的なものは全て拒絶されてしまった。左翼のドグマの中心にあるのは、ブルジョワジーの「抑圧階級」と疎外された「被抑圧階級」が決して終わることのない闘争を続けるという考えである。

⁵ 呉善花『なぜ反日韓国に未来はないのか』（たちばな出版）（2015）

連合国が枢軸国に対して勝利を得たというのは、戦前の西欧と日本の思想界を席捲していたとされる「ファシズム」と「帝国主義」のイデオロギーに勝ったのだというわけである。「ファシズム」と「帝国主義」の再来を防ぐためには、一般大衆は、いつも過去に目を配っていなければならない。それも、捏造された過去に、という論法だった。そういう事情だから、日本が歴史記録を修正しようと試みたり、日本の政治家が靖国神社に参拝したりすると、中国や韓国ばかりでなく、米国政府からも、容赦ないクレームが付く。「日本の帝国主義」と「歴史の否認」が復活すると恐れるのである。

20世紀の初頭に、朝鮮は一夜にして封建社会から近代国家へと変貌した。韓国でも、この事実をどのように説明したらよいかと模索するようになっている。そこで韓国の植民地支配の時期を従来とは違って視点から検討しようという試みが盛んになっている。アキタとパーマーはこの点に注目する。日本が植民地朝鮮で犠牲を払ったという事実を真摯に認めるなら、韓国と日本の関係は改善されることになるだろう。しかし、現在のところ、韓国内でも世界各国でも、民族主義的な物語が文化的政治的エリートの頭を牛耳っている。最近の出来事に鑑みても、近い将来に事態が改善されるとは思われない。差別と迫害の文化は特に米国ではウケがよい。そして、その米国内で、韓国の民族主義者たちが、米国人の道徳的支援を得て、恣意的な歴史物語を宣伝し、反対意見を弾圧しようとしているのである。まことに、書評子にとっては、韓国の民族主義的な物語に対抗しようという日本人の努力は日暮れて道遠しの観がある。米国において自分たちの独特の歴史的アイデンティティを保存しようとしている米国人たち努力に酷似している。興味深い附合である。